
当報告の内容は、それぞれの著者の著作物です。無断引用や転載をお断りいたします。
Copyrighted materials of the authors. Works in progress: Please do not circulate
or cite without permission.

アジア太平洋地域における希望の人類学的研究：新たな身体実践が拓く未来

第2回研究会（2024年12月14日開催）報告

日時：2024年12月14日（土曜）13時～18時

場所：東京外国語大学 本郷サテライト 4F セミナールーム

内容：冒頭で代表者の深川が、研究グループの活動状況と今後の研究会計画について、報告をおこなった。その次に、太平洋地域における自然、科学、未来、社会性、行為主体性、不確定性、希望を研究テーマとする里見、橋爪、2名の研究報告が行われた。各報告の後に参加者全員との質疑応答を行ったほか、最後に全体討論をおこなった。里見によるソロモン諸島と日本のサンゴ礁研究を対象とした研究発表と、橋爪によるメラネシアにおける希望の人類学の理論的／民族誌的な再検討に関する研究発表は、その内容を異にしながらも、希望の人類学を新たに一から構築する志向を根底で共有しており、両者の発表をめぐるディスカッションを通して、メンバー全員で希望の民族誌についての思考と考察をスタートさせ、これからの研究会にとって本質的な議論を展開させることができた。各報告の概要は、下記の要旨の通りである。

（以上文責 深川宏樹）

報告1

「沈む島と育つ岩——サンゴ礁とサンゴ礁科学をめぐる「自然」と「希望」の人類学」

里見龍樹（AA 研共同研究員、早稲田大学）

本発表では、ソロモン諸島マライタ島北東部で特徴的な海上居住を営むアシ（海の民）の事例から出発し、現代世界におけるサンゴ礁のあり方に注目して、「希望の人類学」の民族誌的実例を提示することを試みた。

近年、アシの海上居住は、グローバルな気候変動と海面上昇の下で維持が困難になりつつあると言われる。ここには、「人新世」の危機に直面するアシという、終末論的とも言うべ

きイメージがある。そのようなイメージに対し、アシ自身は、「自分たちが住まう島の下では今でも岩が育ちつつある」、「島が浸水するのは岩が死んで島が低くなっているからであり、海面上昇のためではない」と語る。ここにおいては、われわれにとって自明で一義的に見える「人新世」のイメージが、端的に多義的で非同一的なものになっている。本発表は、このような多義的イメージから出発して、気候変動の危機が語られる現代における「希望」について民族誌的な記述を試みるものである。

2000年代後半にマライタ島でフィールドワークを開始して以来、発表者は、アシにおける「われわれはもう海には住めない」という語りに着目してきた。このような語りの背景には、人口が増加・偏在するマライタ島北部における土地不足への懸念があった。そして2010年代以降、このような語りに、海面上昇と「沈む島」についての語りが加わった。現在のアシは、「もう海には住めない」、「われわれの島はもうダメだ」という「ローカルな終末論」とでも言うべき語りに特徴付けられている。本発表では、そのような「ローカルな終末論」と、われわれの側における「人新世」の語りの両義的な重なり合いに注目した。

アシが居住するサンゴ礁という環境は、気候変動の危機との関連において、現代世界における「希望」を論じる上で注目すべき対象である。サンゴ礁は、地球温暖化に対してきわめて敏感に反応する「脆弱な生態系」と呼ばれる。その点でそれは、気候変動の時代における「自然」とその不確かな未来について人類学的に考察する上で格好の手がかりとなりうる。たとえば、現代のサンゴ礁科学の動向について包括的にレビューしたブレイヴァーマンは、サンゴ礁科学の現状を「伝統的な保全のアプローチ／新しい介入的なアプローチ」に二分した上で、両者を「絶望／希望」の姿勢に対応させている。本発表では、このような考察も参考にしつつ、サンゴ礁をめぐる現代的動態を「自然／未来／希望」の観点から考察することを試みた。

質疑応答では、「海の中で岩が育っている」というアシの語りを、通常的信念論とは異なる仕方で論じる可能性や、われわれの側の「希望」概念から出発しない「希望の民族誌」の可能性、サンゴのような「生命」と「希望」を根源的に結び付けて論じる可能性などが指摘され、今後の研究のために有益な知見が数多く得られた。

報告 2

「希望を到来させる方法—宮崎広和によるメラネシア人類学の彫琢と展開（とその先）」

橋爪太作（大阪公立大学）

本発表は、2つのねらいをもって行われた。

1つは「希望の人類学」という領域の確立を目指す本研究会にとっての最大の先行研究たる、宮崎広和『希望という方法』を検討し、そこで問題とされている希望のあり方をより詳細に種別化することである。本発表ではそれを、宮崎の議論の背景にあるメラネシア地域の人類学—とくに贈与交換を中心とした—に遡ることで行った。

『希望という方法』は自らの「本来の土地」を失ったフィジーの人々の事例を通じて希望というテーマを論じているが、現地語において「希望」と訳すことが可能な言葉が積極的な分析の対象となっているわけではない。むしろ、歴史、ビジネス、相互行為、政治といったさまざまな領域において「希望のようなもの」がアナロジカルに見出されている。

ここで重要なのは、このアナロジーの中で「希望」というわれわれの категория が他者の世界へといかにか転置・拡張されているかである。具体的には、フィジーの贈与儀礼の分析において用いられる「行為主体性の停止」(abeyance of agency) という概念と、そこで参照されているマリリン・ストラザーン『贈与のジェンダー』における行為主体性の議論に着目することで、この過程を明らかにすることができる考えた。

ストラザーンがメラネシア民族誌から提示するメラネシア的行為主体性は、世界に対する主体の制御可能性の増大という近代的な行為主体性とは異なり、むしろ主体の死を契機としたその人格の分解と生成のような、有限の主体を超えた〈生〉に投錨するものであった。このような生のあり方は、過去に沈み込む現在の視点と、過ぎ去った過去における希望の瞬間、未来志向の方向性のぶつかり合いに希望生成の瞬間を見る、宮崎＝ベンヤミンの希望論と本質的に共鳴する。

さらに、行為の意図と効果のあいだにズレを生じさせるような行為主体性は、「不確定性」(indeterminacy) の内的な創出へと開かれる。本発表のもう1つのねらいは、さまざまな不確定性の創出のメカニズムと、それが生成する希望／絶望の比較を行うことである。具体的には、ソロモン諸島マライタ島の熱帯林に暮らす人々がその土地を不確定化する実践と、近代科学が大地の歴史を探究し、現在を不確定化する実践の対称的な分析の可能性を素描した。さらに、人新世の語りに見られるような「人間化した大地」とは異なる、断絶した過去と現在を接続させ、後者の偶有性を浮き彫りにするような大地との関わりを、近代科学の内に見出す可能性について論じた。

その後のディスカッションを通じて、メラネシア人類学の先行研究と対比したときの文脈および本論の新規性をより明確に主張する必要性が指摘され、また「行為主体性の一時停止」をめぐるのは、宮崎の希望論がメラネシアの文脈をどの程度引き継いでいるのかについては、より詳細な検討の必要性が明らかになった。